

名古屋哲学フォーラム 2017 秋

名古屋哲学フォーラム、
南山大学言語学研究センター共催

9月17日(日)
南山大学 R棟R48 (4階)

「言語・進化・生物： 生成文法の哲学をつくる」

<プログラム>

- 13:30-14:30 成田広樹氏講演と質疑応答
「ヒトがつくることば、ことばがつくるヒト」
- 14:30-15:30 大塚淳氏講演と質疑応答
「適応的説明のこれまでとこれから」
- 15:30-15:45 休憩
- 15:45-16:45 藤田耕司氏講演と質疑応答
「生成文法は進化言語学や生物言語学にどう
貢献できるのか（または、できないか）」
- 16:45-18:00 全体でのディスカッション

お問い合わせ先

和泉 悠
人類文化学科・言語学研究センター
〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18
E-mail: yuizumi@nanzan-u.ac.jp

【お知らせ 2017/9/15】

台風の影響により急遽中止となる場合があります。
開催/不開催については、
E-mail: yuizumi@nanzan-u.ac.jp
にお問合せ下さい。

アブストラクト

「ヒトがつくることば，ことばがつくるヒト」 成田広樹氏

人間はどのような生き物か。なぜ人間だけがことばを話すのか。人間が話すことばはどのようなものなのか。人間はどのようにことばを学ぶのか。——これらの問いを考えるために、まず、人間はとどのつまりは単なる一生物（ホモ・サピエンス、ヒト）にすぎず、他の生物種と全く同様に、ゲノムをもとに設計され、生まれ落ちた環境下で生物物理学的な自然法則のもとに成長していく「自然物」であることを思い出そう。とすれば、ヒトをつくり出す要因には、①遺伝的特性、②環境、③自然法則の少なくとも3つがある、ということになる。②、③の要因については、ヒトと他の生物種との間に根本的な差異は存在しないので、「ことばを話す」などのヒト固有の特性は、ほぼ確実に①によって規定されているに違いない。本講演では、人間言語の固有性を支える①の理論（普遍文法）について、生成文法研究が生み出してきた知見を概観する。また、ヒトは言語以外にも、数学、心の理論、推論、科学等、多様な認知能力を示すが、普遍文法（①）のヒト固有性が、いかにしてそれらの他の固有的認知能力と関わっていると考えられるかについても論じてみたい。

「適応的説明のこれまでとこれから」 大塚淳氏

ダーウィンとウォレスによって提唱された自然選択による進化の説明は、生物学を超えて、幅広い文脈で適用・応用されてきた。その一方で、進化を容易に最適化過程と結びつける見方は適応主義として批判されてきた。行動や言語など、複雑な発生過程や社会環境を前提として成立する形質の進化的由来は、どのように説明されうるのだろうか。本発表では、現代生物学哲学における議論を足がかりに、この問題について考えてみたい。

「人生成文法は進化言語学や生物言語学にどう貢献できるのか（または、できないか）」

藤田耕司氏

言語能力を人類固有の生物学的形質ととらえ、その生得的基盤（普遍文法）を仮定する生成文法にとって、言語の起源・進化は当初からの検討課題であったが、実質的な議論が行われるようになったのはごく最近になってからである。その一因としては、過去における言語能力のモデル化がダーウィン進化的説明を拒むほど複雑なものであったのに比べ、現在の極小主義が想定する言語の設計は極めて簡潔であり、適応価を考慮した進化的考察が行いやすいものになっていることがあげられる。特に、言語能力はほとんどが本来は言語とは無関係に進化した下位機能（前駆体）の結合であるとし、また普遍文法の内実を基本演算操作「併合（Merge）」に絞り込んだことによって、今日では進化的妥当性を充足し得る理論構成が可能となっている。その一例として発表者の「併合のみの言語進化」の仮説を紹介する(Fujita 2016, 2017)。

その一方で、高い学際性が求められる言語進化研究において生成文法や理論言語学が果たす役割は非常に限定されており、場合によってはむしろ有害となることさえある。これまでの生成文法研究が一定の成功を収めてきたのは、言語について断片的な見方をとってきたためでもあるが、それが進化言語学や生物言語学に及ぼす悪影響も看過できない。Hauser et al. (2002)による広義言語機能・狭義言語機能の区分はその一例であるが、同様の例を他にもいくつか考察した後、現代の進化生物学の潮流(Extended Synthesis)ともよりよく整合する言語進化のシナリオ構築への提言を行う。この方向に沿うものとして、本年度から立ち上がった新学術領域「共創言語進化」を紹介したい。